江戸日本の街道探訪　第12回

中山道　高崎宿まで

* 浦和宿から高崎宿まで中山道は広い関東平野を突っ切って新潟方向に進む。周囲は、田畑、田園。家康以前の武家の頭領、源氏の故郷と云って良い。中山道は、現代の京浜東北線、高崎線に沿って行く。浦和宿から６㎞歩くと大宮宿に着く。

大宮宿

* 大宮宿は、旅籠25軒、本陣１軒、脇本陣9軒、問屋場4軒で構成されている。脇本陣と問屋場の数が通常の宿場に比べ異常に多い。大宮宿はそもそも馬継ぎ場から発展したからである。地勢から物資流通の要の地であった。そして次第に旅籠が増えてくる。大宮、上尾、桶川の各宿は、健脚な旅人が日本橋を出発した場合、最初に到達する限界点に当たる。
* 中山道関東平野の宿場には、例外なく飯盛旅籠があった。大宮宿の飯盛旅籠には、千鳥・都鳥という美しい姉妹がいた。街道筋の評判。やがて千鳥は宿場の材木屋若旦那と夫婦の契りを交わす。これに横恋慕したのが大盗賊・真刀徳次郎。あわれ千鳥は投身自殺してしまう。そしてこの憎い盗賊を捕らえ、処刑したのが、鬼平こと長谷川平蔵である。処刑場は千鳥が身投げした高台橋の脇にあった。因縁である。橋のたもとには千鳥を弔う女郎地蔵が建っている。
* 英泉描く「木曾街道大宮宿」は、大宮宿を出て次の上尾宿に向かわんとする処の風景である。鍬を担ぐ老人と大きな籠を背負った子。籠に乗るご婦人。街道は、絵の右側を巻いて行く。周囲は畑。田の向こうに富士と丹沢の山々。街道の木々は、桜。桜の幼木が花を咲かせている。中山道はこれから先も概ね、このような田園風景が続く。大宮から8㎞歩くと上尾宿に着く。
* ■図1）英泉：大宮宿：大宮宿を出た景色。中山道は田園の周りに沿って左に曲がって行く。

上尾宿

* 旅籠41軒、本陣1軒、脇本陣3軒、問屋場1軒。宿場の家数は182軒で規模は小さいが､繁盛した宿場である。上尾は、幕府の天領地であり、嘗ては、頼朝の部下、足立氏が。その後には、岩槻城主、太田氏が支配した処。日本橋から10里弱。健脚な旅人なら、七つ立ち（午前4時）していれば、上尾が最初の宿になり得る。ご多分に漏れず、上尾宿には飯盛旅籠も多く、飯盛女は49人。これを目当てに、川越、岩槻辺りからの遊び客も大勢来た。遍照院（上尾駅近く）には、遊女・お玉の立派な墓がある。彼女は、家計を助けるため11歳で身を売った。美しく気立てが良く、しかも賢い、お玉は宿場の人気者になる。ある時、前田家の小姓に見初められ江戸へ行く。しかし、病を得て宿場に戻される。その後も、生家を支えるため大村楼で懸命に働く。だが、無念、25歳でこの世を去る。大村楼の主人は、遍照院に孝行娘、お玉の墓を建立する。遊女唯一の豪華な墓である。

桶川宿

* 本陣1軒、脇本陣2軒、旅籠36軒。宿内家数は、347軒。宿場は、紅花の生産で栄えた。生産量で本場のに次ぐ2位となり、桶川の紅花は、俗に「中山道もの」といわれた、紅花染料、食用農作物の集散地として栄え、紅花が経済、文化繁栄に寄与。
* 本陣は、府川家が経営し、通称、府川本陣。現在、埼玉県指定有形文化財。皇女和宮もここに宿泊。加賀前田家を始めとする参勤交代大名の多くが、府川本陣を定宿として活用した。
* 賑わっている宿場は、例外なく飯盛女が大勢いる。此処も例外ではない。曹洞宗大雲寺には、「女郎買い地蔵」が鎮座。
* 英泉は、「桶川宿」で北に広がる湿潤曠原に暮らす庶民の姿を描く。簡素な家の庭先で穂を漕ぐ農婦、旅人が道を尋ねている。湿地帯の中を蛇行する中山道。旅人が馬に乗っている。これも宿を出た後の田園風景と思われる。

　■図2）英泉：桶川宿

鴻巣宿

* 桶川から8kmで鴻巣宿。陣1，脇本陣1，旅籠58軒。鴻巣の発展は、家康が、鷹狩り用休憩地として、俗に言われる、鴻巣御殿を建設したことに始まる。鴻巣御殿は家康、秀忠、家光の三代の将軍が鷹狩りの際に、利用した。
* 鴻巣宿近辺からは、松山（東松山市）に至る吉見道、簑田追分から忍城に至る忍道、加須市に向かう道などが連結。各道に立場ができ、賑わった。中山道では、次の熊谷宿との間に間宿として吹上宿ができ、忍道はここから始まっている。他に久下（熊谷）、簑田（鴻巣）、東間（北本）に（旅人、人足が休息する場所）があった。
* 英泉が描いた「鴻巣宿」は、宿を出て次の熊谷宿に向かって少し行った間宿・吹上辺りの風景と思われる。人家が途絶えた田園の中をジグザグに行く中山道。榎木の若木が立ち、遠くに富士。旅の上人や虚無僧が行き交っている。
* ■図3）英泉：鴻巣
* 鴻巣宿の北に郷がある。ここは箕田源氏発祥の地。羅生門の鬼退治で有名な渡辺綱を祀る神社や、清和源氏の祖である源経基の居館跡もある。
* 宿場の江戸口近くにある勝願寺（浄土宗の名刹）は家康の帰依を受け寺領３０石。
* 江戸中期から雛人形製作が始まり、盛んとなり、江戸周辺に出荷された。

熊谷宿

* 鴻巣宿から６㎞歩くと熊谷宿。本陣２軒、脇本陣１軒、旅籠１９軒、問屋場１軒。宿内家数１７１５軒。板橋宿に次ぐ人口規模を誇る。しかし、旅籠１９軒は少ない。熊谷宿には、絹屋、綿屋、糸屋、紺屋など機織り関係の店が建ち並び、宿場より、むしろ商いの町として発展した。

深谷宿

* 次の深谷宿は、本陣１，脇本陣４，旅籠８０軒以上。旅籠の数では中山道No1。大いに繁盛した宿場である。遊郭もあり飯盛女も多い。英泉の「深谷之駅」には着飾った飯盛女が活躍する様がいきいきと描かれている。宿内人口は２０００人弱。当時とすればかなり大きい。宿場の北側に、渋沢栄一の故郷がある。

■図4）英泉：深谷之駅：飯盛女の活躍

本庄宿

* 本庄宿は中山道最大の宿場である。宿場人口４５５４人、家数１２１２軒。旅籠数は７０軒で中山道３番目。中山道を挟んで両側に細長く夥しい数の家が密集している。本庄宿の北近くに平行して利根川が流れている。本庄宿は利根川船運の物資集積地として商業が発展。嘗ての城下町が江戸時代になると商業と宿場の町に。医師、穀屋、豆腐屋、米屋、酒屋、煙草屋、菓子屋、鍛冶屋、大工、建具屋、本屋、質屋、両替屋、薬種屋など、ありとあらゆる店が揃っていた。
* 宿場は江戸から京都に向かって本宿、仲宿、上宿と形成。本陣２軒、脇本陣２軒。皇女和宮は、豪壮な田村本陣を宿とした。江戸寄りにある、本宿の北側に本庄城（慶長１７年廃城）があり、その城下町が本宿になり、京都方向に宿場・商業地が発展した。
* 本庄は、水運が良く、飲料水が確保できる、高い山が無く気候温暖ということで遷都意見書が出された処でもある。
* ■図5）本庄宿絵図：中山道の両側に密集して立ち並ぶ家々
* 中山道は本庄宿を出て少し行くとにぶつかる。この川は鳥川に繋がり、やがて利根川本流に入り込む。広い川瀬には、橋が架かり、深い処は舟渡になる。英泉は京都側から描く。大名行列が長い橋を渡っている。そして舟に乗り向こう岸に着く。その先、本庄の町並みが描かれている

倉賀野宿

* 神流川を渡り、どんどん行くと次が新町宿（現高崎市）。中山道は鳥川沿いに進み、この川を渡って倉賀野宿（現高崎市）に出る。倉賀野宿は本陣１軒、脇本陣２軒、旅籠３２軒（また、宿屋に関係する家は６０余棟あったと云われている）。の南に鳥川。そこに倉賀野河岸。鳥川は利根川に繋がるので、利根川船運流通の利を得た。倉賀野から米、煙草、雑穀、絹、綿などが江戸へ運ばれ､江戸からは塩、藍、お茶、糠、太平洋で獲れた海産物、陶器、小間物などが運ばれてきた。最盛期には船問屋７４軒、舟運船１５０余隻が活動。

高崎宿

* 高崎宿には、本陣、脇本陣が無く、旅籠は僅かの１５軒。高崎宿は、高崎城の城下町で、家臣が住む武家町である。風紀も厳しく、旅人は普通、倉賀野宿で宿に宿泊した。
* しかし、問屋場は６軒もある。これは中山道を通じて軽井沢の先の追分宿から越後に通じる街道、隣の倉賀野宿から日光に通じる例幣使街道（毎年、天皇の代理として朝廷から神への捧げ物＝例幣を日光東照宮に収める使節団一行が通る街道。中山道が使用された。）の流通管理を高崎宿が担っていたためと思われる。文字通りの宿駅である。
* この先、中山道は、高崎宿を出ると、京都方向に向きを変える。そして碓氷峠から諏訪、木曽路の山々を旅するルートが始まる。